修学旅行で得た九州の植物

佐　藤　茂　樹

最近に3回続けて高3の修学旅行に付添い、九州の各地を廻ったのを幸いに、宿泊時の早朝とか、休憩時の間など、生徒の管理と見学に支障のない僅かの時間を利用して、植物の観察と採集とを試みた。もとより管見中の管見ではあるが、他山の石ならぬ他山の草木としてご参考にもなるならばと考え、その概要を記してみることにした。従来の案内記には社会科的の記事が多く、自然科学の面が乏しいので、これを補なう心組みもあることをご諒承頂いてご叱正が願いたい。まったくのかけ足で文字通り超スピードの忙しい旅行であり、予備知識のまったく欠けていたものとしては、比較的に効果を挙げ得たのには次の3点を挙げることができる。

1. 連続して回を重ねたため、時間的にも精神的にもゆとりを生じたこと。
2. 季節的にみて早春と晩春と見学の時期を異にしたこと。
3. コースに多少の変化があって、地域的に観察範囲が拡大されたこと。

1では回を重ねたために重複した場所の見学や、連絡などを簡素にして時間的に余裕をうみ出し得たことで、例えば城山から鹿児島市街を見下して、案内者から聞く観光物語の間を利用してバリバリノキ、バクチノキを得たことや、鵜戸神宮で記念写真撮影中にオオイワヒトデ、コバンムグラなどを採集したごときで、僅か5分か10分そこそこの捻出ではあるが、観察と採集にはまたと得難い千金に価する貴い時間であった。

2の季節面では1～2回はアブラナとサクラの花咲く3月末で、ハクサンボクは花盛りであったが、第3回目は5月中旬だったので麦の穂は色づくし、ハクサンボクは果実をつけたときで、植物の相観には著しい相違がみられたのであった。

3のコースでは第1回は宮島に寄港し別府から宮崎（青島、鵜戸を含む）—鹿児島（城山、桜島）—熊本—阿蘇—別府の順で、これを仮に基本コース南九州環状線とすると、第2回は基本コースから鵜戸を省き、阿蘇から熊本に戻り水前寺をまわって、三角—島原—雲仙—長崎—門司の西北九州コースを加え、第3回では門司—博多—日田—杖立温泉—大観峰（阿蘇）の北部縦走コースをとり、桜島では島の南岸を巡り大隅半島に出て、鹿児島湾の東側を北上して霧島に至る南部縦走コースをとり、飫肥杉の見事な植林地帯を通過し、日南海岸から鵜土—青島—宮崎—別府に出た逆コースで、回毎に多少コースを換えた地域の拡大で、大いに知見を広めることができたのであった。

主要観察採集地

青島　砂岩と頁岩との互層からできた周囲約1キロの低平な一小島であるが、ビロウを優占種とする亜熱帯及び暖帯南部の植物が見事に繁茂し、南国的情緒豊かなまことに美しい眺めを呈している。参道にはハマビワがまず目をひく。社殿の右の木戸から特に許可を得て林内に入ると、ヒギリ、クワズイモなども混生し、ホウライカズラ、フウトウカズラなどの蔓植物が、シュロに似たビロウにまとい付き密林をさらにうす暗くして、いわゆるジャングル地帯、熱帯降雨林を想わせる。この特別天然記念物を保護するために、張りめぐらした鉄条網の外囲にはダンチクのほかに、ハマゴウ、ハマエンドウ、ボタンボウフウ、ネコノシタなどの塩生植物が砂地を覆っている。社殿入り口左手売店裏の熱帯植物園も一応観察する価値がある。

鵜戸　駐車場付近はクス、タブノキを主とした常緑広葉樹林でアオガシ、アラカシ、ユズリハなどのほかに、イヌビワ、ハクサンボク、アカシデなどの落葉広葉樹も混生する。参道を下ると右手の石垣にはフウトウカズラ、ハスノハカズラ、テイカカズラなどがからみつき、仏焔苞の珍奇なムサシアブミや暖地性のツルソバなどが珍らしい。社務所の前から朱塗の太鼓橋付近にはヒメイタビの他にトベラが多く、その樹下には花をつけたオオハンゲ、ツワブキが群生している。海側にはハマヒサカキ、ハマモッコク、ハマビワ、マテバシイなどがあり、オニヤブマオやトキワススキが繁茂する。日向灘の青海原を見下す絶壁の岩盤にはボタンボウフウ、ハマボッス、多肉で鋭刺の多いハマアザミが群生する。参道中途の小道を南に入ると、気根を垂下したアコウの大木が自生し、その下にはオオイワヒトデの見事な群落がある。

城山　バスは頂上まで登る。車の窓から見る途中には落葉樹が多い。これは人手の加わった二次的なものである。売店のある頂にはシイが優占種で大木となり、樹冠がよく繁って昼もなお暗い。これが城山の極相、クライマックスを形づくっている。珍木バリバリノキは長いかさの曲った柄のおかげで取れたし、薩摩の国名を冠した

サツマイナモリウソは、発車直前寸秒の採集で特に印象が深い。

桜島　3月には大きなサクラジマ大根が樽に植えこまれて、袴腰の売店の店先に展示され花も咲いていた。また、近海産であろう純白で美しい造礁サンゴの幾種かが、店の陳列窓を賑わしている。展望台へ登る坂道の左には普通に目に触れる一般植物が茂り、ホウロクイチゴ、サツマサンキライ、ナワシロイチゴ、ムラサキケマンなどもあるが、右は大正3年の大爆発でできた黒灰色の未だに風化の片鱗さえも見せない多孔ガラス質の溶岩なのである。それでも道一つ隔てた場所から風で運ばれた土粒のためにマメヅタ、ヒメイタビ、ヒトツバなどが侵入し、特にタマシダの多いのが目につく。

バスで島の南岸を廻ると大正熔岩でも平らな場所には、最初の開拓者とでもいうべき藍藻類かコケ植物らしいものが、淡い緑の肌着のように地表を被っている処もあった。場所によっては比較的強い日射と乾燥、養分欠乏などの悪条件にも耐えうるイタドリとか、ススキ、ヨモギときには黒松、ヤシャブシ類らしい矮小木本も見えた。途中の安永溶岩は噴出後180余年を経過しているので、岩石の風化が進み、黒松林もあればタブノキ、シイ、カシ類などの常緑広葉樹林も相当に発達している。ここを過ぎて再び東の熔岩台地に出ると、全く一木一草も見当らない荒涼たる物凄さであるが、この熔岩の噴出で地続きとなった大隅半島に出ると、俄然その相を異にし常緑の広葉樹がうっそうとして繁茂し、ツタ、カズラも多く、下草も地膚を埋め尽している。桜島は城山や大隅半島の対比でも、それ自体の間だけからみても無毛の極端な裸地荒地から、極相に近いあるいは極相に達した密林までの段階があって、最も良い大自然における植物群落遷移の展示場であり、規模の大きな実験観察場だということができる。

大観峯　阿蘇外輪山の一角で世界一といわれるカルデラの壮観が一望のもとに展開される。鯉のぼりも過ぎた5月の中旬というのにワラビ取りと、フキ摘みの人があちこちに見られた。後続バスの故障で救援のため余儀なく歩かせられたのが幸いで、思いがけない観察と採集ができた。峯の上ではハルリンドウ、アマドコロ、ナツグミ、キジムシロなどが開花していた。坊中に向う下り道の途中ではタニウツギが花の真盛りで、オキナグサは花後の果実がその名の通り、白髪の姿にそよ風を受けていたし、杉木立の中にはアオマムシグサが妙な花をつけていた。

それこれ思い合わせると峯の頂きは、山麓平野に比べて花暦の上から約1カ月の差のあることに気がつく。従って阿蘇の主峯1,592m付近の花暦が、平地に比べてもっともっと差のあることが想像にかたくない。

霧島　神宮に参拝したのは夕闇せまる時刻で、樹種はさだかでなかったが手当り次第に採ったものはモミ、オオズミ、ハリギリ、シキミなどであった。林田温泉の就寝は午前2時であったが朝は4時半に床を離れ、温泉プールの上手に植物を探る。格別珍らしいと思うものは見当らなかったが、参考資料としてガマズミ、イヌツゲ、イヌシデ、ミズキ、イワガラミ、オオバノトンボソウなどを取る。生垣にはイスノキを用いている家があった。これらの種類からみると霧島温泉付近は、温帯と暖帯北部のものとが互いに入り混った林相で、摩耶山や再度山付近の植生に対比することができる。

分布上主要な植物

ビロウ　ヤシ科

常緑の高木で幹の高さ5～10メートル、茎は枝を分たず基部が膨れている。葉はシュロ状で広く茎の頂から群り生じている。若い葉をさらして円扇をつくる。材を割ってステッキにしたりカサの柄にしたり箸にもする。青島の名木で琉球、小笠原島、台湾の海岸近くに多い。

アコウ　クワ科

西南暖地の海岸近くに自生する常緑の高木で、幹から気根を出すことや傷をつけると乳白色の液を出すことも特徴の1つである。鵜戸の他に鵜戸と青島の中間の神社の境内に、株分れした気根の垂れ下ったものがあり、桜島の袴腰でも1株だけ自生品を見た。

ショウベンノキ　ミツバウツギ科

常緑の小高木、葉は3出複葉で長い柄があり対生する。茎を切ると多量の水液を分泌するので、小便を排出するのに見立ててこの名がある。

バリバリノキ　クスノキ科

常緑の高木、葉はカシに似て狭長披針形で堅い。この葉が吹く風で互いにすれ合うと、バリバリと音をたてるというので名づけられた。採集品には青緑色のドングリに似た実が群り着いていた。

バクチノキ　バラ科

葉は厚く卵状楕円形で鋭い鋸歯があり、葉の柄にはサクラのように蜜腺のあるのが特徴である。幹の皮ははげ易くその跡が赤褐色になるので、バクチ打ちが勝負に破れて赤裸になるのに例えられたものである。

このバクチノキとショウベンノキ、バリバリノキとは城山の3名木だとして、バスのガイド嬢は巧みな口調で、節おもしろく説明して旅の疲れを慰めてくれる。

ムサシアブミ　サトイモ科

3つの小葉からなる2枚の大きな葉の間から肉穂花序を出す。仏焔苞の形が特異でその外面には緑と白の条線が走り、内面には黒と紫の鮮かな縦縞がある。地下部には球状のイモがありイモの直上から白いひげ根が放射状

に出る。我が国西南暖地の産である。

クマタケラン　ショウガ科

鹿児島県の南部に野生する。葉はミョウガに似て広く濃緑色、多年生の草木で多肉の根茎があり花は白色で実は赤い。

特　殊　植　物

ザボン　鹿児島の名産で外果皮が淡黄色直径17cmぐらい、12月ごろに熟するがしばらく貯えて刺激性を除き、4月ごろになってから市場に出す。中果皮は白くて厚く弾性があり綿のような感じがする。味は甘味も酸味もともに淡白で少しく苦味がある。生食の他に砂糖漬にする。

果肉の淡黄紫色なのをウチムラサキ、形の西洋ナシ形のものを文旦という。

サクラジマダイコン　日本作物の優逸品で冬の間でもよく育ち、成長を長く続け得るという特性を持つ。二原型の放射中心柱が第2次、第3次と次々に分裂して組織が増加し、根部の肥大が続いてどんどん太る。1個最大の重さ20kgぐらいになる。基本の染色体数は9でゲノムも1種で倍数体ではない。付、長さ160cmにもなる守口大根は二原型のままで太らず、長さだけが異常に伸長したものである。

スイゼンジノリ　藍藻類で寒天質の中に暗紫緑色の多数の細胞のはいった不規則な粘塊である。日本の特産で天然記念物に指定されている。産地の水前寺（公園より少し離れた場所）には天然産が著しく減少したため、水の清い浅い池で人工的の養殖を図っているという。繁殖の最も盛んなのは冬期で春と秋の2期に採取し、よく水洗いした群体を刃物で細かく切り、瓦に盛って日乾し圧搾してボール紙状にした製品もあれば、生鮮なものを砂糖漬にしたものや塩漬としたものもある。水前寺公園の店で買ったものはビン詰の佃煮状のもので、レッテルには「翠雲」としてあった。福岡県にも紫金苔、寿泉苔の名でこの植物の製品がある。

採　集　植　物

合弁植物	12科	18種
離弁植物	30科	56種
単子葉植物	6科	9種
裸子植物	2科	3種
羊歯植物	2科	9種
計	52科	95種

前記のうち場所と時間との関係で最も多かったのは鵜戸の36種で、次が城山の11、桜島の11、霧島10、阿蘇8、雲仙5、別府4、杖立3、宮崎・長崎・飫肥は僅かに2ずつ、鹿児島では栽植したヤクタネゴヨウの果実を採集しただけであった。鵜戸で採集したもののうち主要なものを次に挙げてみる。

ハマアザミ、ネコノシタ、ハクサンボク、コバンムグラ、サツマイナモリ、ハマビワ、ボタンボウフウ、ハマヒサカキ、タブノキ、ホウロクイチゴ、ハスノハカズラ、アコウ、フウトウカズラ、ヒメイタビ、ツルソバ、ヤナギイチゴ、タケシマラン、オオハンゲ、ムサシアブミ、オオイワヒトデ

九州植物の概括

日本植物の区系からみると九州はおおかた暖帯に属し、常緑のシイ、タブノキなどを極相とす地域が多く、山地では温帯の落葉樹林によって景観づけられている。また、一部は暖流の影響を受けて亜熱帯性を帯び、志布志湾沿岸、日南海岸、鵜戸、青島、それに旅行の圏外ではあるが薩南地方、五島列島などではアコウ、ビロウなどの自生を見ることができる。